



医療安全管理 研究会

富山大学附属病院 災害救命センター診療教授

歯科で行う一次救命処置

～CPR用マネキン、AEDを使った実地訓練～

今村歯科医院 院長 元富山大学附属病院診療准教授

若杉 雅浩

今村 知代



4月26日、53人が参加 (ホテルグランテラス富山 4F・瑞雲の間)

はじめに

先日は雨天、また金曜日の午後7時半という、誠に迷惑な時間帯にも関わらずご参加くださった皆様、本当にありがとうございました。終了後「来てよかった～」との言葉も頂き感謝申し上げます。

今回は「一次救命処置」を富山大学附属病院災害救命センター診療教授の若杉先生と救急に精通した医学部の学生さんのご協力を得て効果的な学習法(5ページ下段を参照)を基本に体験して頂きました。

実際、目の前で人が倒れたら…体はすぐには動くでしょうか。滅多に遭遇しないことを即座に、間違いなく順序良く行うのは大変です。今回行っていただいた幾つかのポイントを職場やご実家で定期的にシミュレーション、反復されることをお勧めします。そしてもう一つ、「胸骨圧迫」が重労働であることもご体験いただけたかと思えます。たった一人で上質な胸骨圧迫をやり続けることは大変です。職場の同僚、上司、ご家族にも是非教えて一次救命処置の基本的知識を広めてください。

一次救命処置のポイント

《反応を確認する》



目の前で人が倒れたら周囲の安全を確認し近寄ります。肩を優しく叩きながら大きな声で呼びかけます。開眼、返答など何らかの反応があるか確認しますが、全身痙攣がみられたり無反応ならば「反応なし」として対

応します。

《人と物を要請する》



意識のない人がいることを大声で周りに知らせます。緊急通報を促し、AEDの手配、人員召集を申し出ます。

《心停止の確認》



気道を確保し患者の口元に耳を近づけ、視線は患者の胸郭をみながら呼気に合わせて胸の上がり下がりがあるかみます。気道の確保で呼吸の改善がみられるか確認し、「呼吸がみられない」または「喘ぎ呼吸(死戦期呼吸)がある」、さらに意識の反応もなければ心停止とみなし直ちに胸骨圧迫を開始します。この際、気道確保と同時に頸動脈を触知し、脈拍が無いことを確認してもよいです。しかし脈の確認に時間を費やし胸骨圧迫が遅れるような事があってはなりません。

《絶え間ない胸骨圧迫》

掌の付け根部分で胸骨の下半分を圧迫します(剣状突起を圧迫しないよう注意)。押す深さは少なくとも5cm沈むまで押します。押す早さは1分間に1



00回のテンポで繰り返します。ポケットマスク、フェースシールド、バグバルブマスク等の準備があれば30:2の比率で胸骨圧迫と人工呼吸を交互に行います。

《AEDをつける/つけてもらう》



AEDが運ばれたら直ちにAEDの電源を入れます(機種によっては蓋を開けると作動するタイプもある)。電極パッドの粘着面をしっかり胸に貼ります。この間も胸骨圧迫を中断する事の無いように注意します。

AEDが「心電図を解析します。患者に触れないでください」の合図でいったん胸骨圧迫を中断します。

《AEDの指示を聞く》



AEDが除細動の必要性(VF、または無脈性VT)を判断します。

除細動が必要な場合は「ショックが必要です。離れてください」と指示しますので、全員が患者から離れます。ショックボタンを押す人は「離れてください」と声をかけ全員が患者に触れていないことを確認しショックボタンを押します。電気ショックを行ったあとは直ちに胸骨圧迫を再開します。

AEDが「ショックの必要はありません。胸骨圧迫を続けてください」と指示する場合はそのまま胸骨圧迫を継続します。

《質の良い胸骨圧迫》



質の良い胸骨圧迫を持続するため役割交代など行いながら救急隊の到着まで処置を続けます。AEDが装着されている場合、自動的に2分ごとに心電図の解析が始まります。音声に従い胸骨圧迫を中断するなどAEDの指示に従います。

《救急隊の到着》

救急隊が到着したら簡潔に必要な情報を提供します。事前に年齢、既往歴、常用薬、倒れる直前の状況や処置、通報後に行った処置、緊急薬剤の投薬状況やAEDのショックの回数、CPRの回数等を時間を追ってまとめておくとう有効です。

まとめ

今回120分という皆様の貴重なお時間をいただき「歯科で行う一次救命処置」を開催しました。救急にご興味をお持ちの方には今回の内容は少し物足りなかったかも知れませんが、基本的な内容でありながらも実技の難しさも体験頂けたと思えます。歯科医師の先生方や歯科医院スタッフの皆様には、今後はもう少し突っ込んだ内容を覚えていただければと思っています。

今回の集まりを始めとしてBLSやDCLSの講習会に参加して頂き、そして習熟された皆様が講師となって歯科界の救急対応のネットワークができればいいなと夢見ています。

特別講師で来ていただいた若杉先生や他救急の医師、蘇生に精通した医学生、看護師、救急隊のみんなが開催しているDCLS(ICLS)や他の研修会には是非参加してみてください。受講に少し不安という方には私であればいつでもお話をさせていただきますのでいつでもご連絡ください。皆様本当にお疲れさまでした。

文責：今村知代 画像：『DCLSコースガイドブック』(へるす出版)より抜粋